海外派遣留学プログラム報告書

（報告期間：2020/02/03～2020/03/04　）

１．勉学の状況

オストラバに到着してからの一週間はウェルカムウィークで授業の無い期間でした。二週目から履修登録期間が始まり、授業によっては翌週から始まるものもあり、本格的に学生生活が始まったのは 3 週目からでした。コース検索画面上でその授業が今学期に開講されているか否かの判断が出来かねた為に、当初履修予定であった授業を大幅に変更せざるを得なくなり、履修を組み直す段階では学習意欲に影響が出ていました。しかし、履修を組み直す上で、ここに滞在する半年間で何を学ぶのか、ここでの学びをどう繋げたいのか、どのような姿勢で学習するのかを改めて考え直す機会となりなした。

私が所属する学部の授業の多くが、履修予定であった授業を含め開講されない状況の中、履修する授業を一貫したテーマにする事は難しいものでした。その為、開講されている中から、今後の学術的な場面を含めそれ以外の場面でも私自身の人生に影響を与え得るものを履修する事にしました。履修した授業の 1 つに理学部の Limits of Development in China and India という授業があります。この授業では地域を絞る事で、様々な観点において対象を深く掘り下げる事を可能としており、学習方法もプレゼンテーションと課題の動画をまとめるレポートを週ごとに交互に行うもので、これからクロスメジャーやそれ以降の研究を行なっていく上で必要となるスキルが何か、調査や研究対象の掘り下げる上で重要となる視点が何か、などを学ぶ事が出来ると考えました。実際に、１ヶ月この授業を通し、英語の文献や web サイトを読む事や、日本語に訳されない海外の報道を実際に見る機会を得た事で、得られる情報の幅が広がった事を感じました。またその重要性は感じるものの、触れた情報全てを自分のものにするだけの語学上のスキルが足りていないことも実感しています。その他の授業は、英語 II で塩谷先生が仰っていた「英語を学ぶ上で、英語だけでなくヨーロッパ言語に触れた方がよい。もしまだ触れた事がないなら尚更。英語ばかりが必要とされているがヨーロッパ言語も非常に面白いものだ。」ということを思い出し、せっかくチェコ語の身近に溢れる環境に身をおいているならと、チェコ語を履修する事に決めました。英語でチェコ語を学ぶ難しさや、テキスト自体もチェコ語である事により難易度は高いものの、実際に現地に身をおいている事で実践の場が身近にある事から大変興味深いと感じています。そのほか、English for tourisum という授業は、私の出身地が沖縄という観光に深く関わる場所であり、観光業についての千葉大で学べない専門的な内容に触れらるのなら学びたいと考え履修しています。実際に様々な国から来た留学生とその国々での観光の可能性や課題についてディスカッションを通して学び合ったり、生徒のプレゼンを通し、学習意欲の高さや専門知識の多さを感じたりしています。この 1 ヶ月間、授業においては英語での細かい指示を的確に理解する事が難しいと感じる場面も多くありましたが、他の学生や担当教員に確認を取る事で補って

おり、わからなかった事を恥じずに尋ねる、向き合うという姿勢をも養う期間となりました。

２．生活の状況

寮生活においては、部屋にクローゼットと机とベッドがそれぞれあるだけの三人部屋で、仕切り等もなくプライバシーを確保する事が難しい状況です。これが数日と続いていくうちに、私自身にとって結構なストレスとなっている事に気づきました。冷蔵庫もホテルの一室にあるような小さな立方体のようなものを三人でシェアするというのが難しく、食材を大量に買い込み、そのほか作り置きなどで限られたスペースを消費される事が続き、自分自身の希望をきちんと伝えることの重要性と同時に難しさを感じました。さらに就寝時間の個人差と壁が薄いことなどにより、他のフロアや部屋からの深夜の騒音に度々悩まれる事があります。個人的な話になると、ルームメイトが恋人を 1 日の間で頻繁に部屋に招く事もストレスとなっていました。最近新しく増えたルームメイトび女性がムスリムである事により頻繁に男性が出入りする事が無くなったので解決しましたが、思っていた以上に留学先での寮生活の難しさを痛感した１ヶ月でした。

しかし、このように想定していた以上の困難や不自由はあれど、私が日本でどれほど恵まれた生活をしていたかを痛感し有難みを感じる事ができたのは幸運でした。そして、毎日寮の中で多くの留学生と顔を合わすうちに、授業外の時間にも交流する事ができ、友人もでき出来、放課後や週末には出かけたり、来て当初揃えなければならなかった調理道具などを共に買いに行ったりして日々の生活を支え合うこともできています。基本的には、量の共同キッチンで多くの学生が自炊をしています。私も授業と授業の間に時間がある為、昼食も寮に戻って作って食べたりしています。時折、寮のロビーで一品持ち寄りパーティをしたりしています。

オストラバの街は、チェコの第三の都市ということもあり、都会すぎず田舎すぎず、非常に住みやすい街であると感じます。川も流れており、寮は見晴らしの良い高台にあり、景観もよくとてもこの街を気に入りました。街では基本的にクレジットカードでほとんど生活できてしまうほどキャッシュレス化が普及しているとも感じます。

大学から徒歩 10 分ほどの場所にショッピングモールがあるので、パソコンを大学と寮にひいてある Wi-Fi に繋ぐ際に生じていた問題が解決するまでの約１ヶ月間、そのショッピングモールのフリーWi-Fi を利用していました。細かな問題こそ様々ありましたが、約１ヶ月を通し１つずつ徐々に解決していけたので、現状はようやくこの土地で生活していく為の地盤が整ったというところです。

これからもまだ慣れないことへの対応に追われたりと大変なこともあるだろうとは思いますが、自分の殻を破る事で乗り越えていけることは多いと実感した１ヶ月でしたので、今後もこの貴重な経験を楽しみながら頑張っていきたいと思います。

海外派遣留学プログラム報告書

（報告期間：2020/03/05～2020/05/04）

１．勉学の状況

欧州におけるコロナウイルスの急速な感染拡大を受け、チェコにおいても 3 月の 2 週目から緊急事態宣言が出され、それに伴い大学も休みになりました。当初は 2 週間の休校のちに授業再開の目処を立てていましたが緊急事態宣言も延長する流れの中で、徐々にオンライン上での今セメスターの学習が提供されるようになりました。

学習形態としては、主に毎週授業の代わりに授業に関連する動画や文献の URL がオストラバ大学のウェブメールから送られてきて、それを題材にレポートを作成というものでした。また、授業内でやる予定であったプレゼンテーションのスライドを提出し、オンライン授業で発表や、オンラインでクラスメイトとフィードバックし合うなどして可能な限り予定されていた内容を学習できるよう工夫されていました。そのほか留学生向けに開講されたチェコ語の授業を履修しているのですが、各自で指定された範囲を教科書で学習し、教員にメールでが課題を提出するという形を取っていました。

3 月の下旬に帰国するまでの期間は寮で自主学習をしていました。量の部屋は決して広いものではなく、同室には二人のルームメイトがいた上にその恋人も主に私たちの部屋で過ごしていた為、長時間集中して学習できる環境ではありませんでした。そのため、寮にある学習室というパソコンが使える部屋で課題に取り組んでいました。しかし三月後半に入ると、学習室もコロナウイルスの影響で使用できなくなってしまったので、帰国直前の 1 週間ほどはあまり集中して学習に取り組めていませんでした。

各授業、留学生にて対し帰国後も履修できるように体制が整った為、帰国後は引き続きオンラインで課題を提出したり ZOOM を使用したオンライン授業に出席したりなどして留学を継続しています。四月の一ヶ月間はそのようにして過ごしました。一人暮らしで集中しやすい環境にある為、学習が捗る一面もありながら、同時に、出席して取り組むというある意味の強制性が無いと己を律し集中力を持続させる難しさも感じました。また授業の代替課題という事で実際に生徒の負担が増えた事もありました。例えば授業に出席している時間のディスカッションやプレゼンテーションが、長めの文献や資料を読んでのレポートという約 1 日がかりの課題に変わったりして、語学のスキルによって課題の重さに個人差が出たように感じました。

しかし一方で、この一ヶ月間の自宅でのオンライン留学を通し自分自身の成長に繋がったとも感じています。オンライン授業での聞き取り、自分自身のプレゼンテーションでのスピーキング、課題を通しての読解と英作文の良い訓練になったことはもちろんのこと、自身が学びたいと希望した授業を引き続き受講出来た事で、帰国後においても学びを深められたからです。残り一ヶ月ほどになると思いますが、完全な形では無いにせよ、最後まで与えられたせっかくの学びの機会

を最大限に活用し吸収していきたいと考えています。千葉大学の授業との両立が難しく心が折れそうになった時には初回と併せて本報告書を読み返したり、これまでの課題を見返すなどして初心を取り戻したいと思います。

２．生活の状況

生活の状況は、先述でも触れたように 3 月中旬から大きく変わりました。緊急事態宣言が出されたことにより、外出が制限されました。飲食店のほとんどが閉まった事もあり、基本的に三食自炊という生活でした。散歩は制限されていなかった為、天気の良い日は大学近くの川沿いや丘に登るなどして身体を動かし、気分転換もしていました。3 月後半に寮内でもマスク着用と他人とのソーシャルディスタンスが義務化されるまでは、寮のロビーのフードコートで、他の留学生達と一品持ち寄りのディナーを頻繁に行い、自主隔離期間においても交流を図っていました。しかしそれも 3 月後半には難しくなった為、ほとんどの時間を部屋で過ごし、友人と二、三人で午後に一度散歩の際に外出するという生活を送っていました。緊急事態宣言が出されたことにより、一人になれる時間がほとんどなくなった事が想像以上にストレスに感じられました。ルームメイトの一人が、基本的に恋人と一緒に行動していたのですが、外出が制限された事で私達の部屋で日常を共に過ごすようになり、私自身のプライバシーや生活に影響が出ていました。ルームメイトに一度そのことを相談したのですが、その時は真摯に受け止めてくれたものの、恋人の方の納得がいかなかったようで、私と彼との関係がギクシャクしてしまいました。そしてその後も彼は私の部屋に居座り続けていたので、帰国せずに現地で留学を続けるのであれば、寮の事務に掛け合って部屋を移動させてもらう予定でした。

そのような問題もあった一方で、緊急事態宣言の中、オストラバ川や丘まで散歩したりとその土地の自然を感じる事が出来た期間でもありました。普段なら通学にバスを使っていた道のりを歩くだけでも違った景色が見られました。またバスが通らないような小道を歩き、この道がここに繋がっている、といったように土地勘がついていき私はオストラバで生活しているのだという実感が湧きました。3 月以降、出来る事や経験できることは限られていましたが、その中でいかにこの期間を有意義なものにするかというポジティブな思考に変えた事で、現地に滞在した時間は二ヶ月未満であったものの非常に印象に残る経験になりました。また、このような事態になったからこそ、普段の週末であればほとんどの留学生が旅行に行くなどして交流ができないところを、寮に全員がいる事で交流を深める事ができました。

さらに、世界各国のコロナウイルス感染拡大の状況を、留学生という立場でもあり、自分自身に大きく関わることとして情報収集に尽力した事も私にとって留学先での大きな経験の一つになりました。チェコ共和国の状況と外国人への対応や、欧州各国での動向や対応、日本の帰国者への対応や大学の方針、外務省の対応、それらを踏まえた上での最終的には私自身の判断、というように様々な状況を加味して考えなければならなかった為、毎日その判断も状況に応じて変化していました。さらに、他の留学生とこの機会にそれぞれの出身国でのコロナウイルスへの対応や国民の反応など、私が普段目にするメディアでは知り得なかった情報を共有でき、政治に対す

る考え方や WHO などの公的な機関でさえも政治的な要因で完全には信用できないという事など、意見を交わす中で学ぶことが沢山ありました。帰国をするという決断に至ったのも、3 月下旬以降、日本行きのフライトが急遽キャンセルになっているケースが増えたからでした。日本の帰国者に対する水際対策の検疫強化により、帰国後の 14 日間自宅に自主隔離をし、毎朝の検温をして大学に提出していました。その期間は友人の保護者から食料を届けて頂いたり、学部の教職員からの救援物資や両親からの仕送りなど、様々な人の支援があって生活することができました。帰国後の一人の隔離期間、自分自身が帰路で感染していないか不安な心持ちでありましたが、様々な人からの支援やお声掛けが本当に有難く感じられました。

隔離期間が終了して後も、日本も緊急事態宣言下であったので、継続している留学の課題の合間に、息抜きとなるように散歩と食料調達をしています。また、この期間も留学を継続できているということで想像以上に日々忙しく過ごしていた為、士気を保つために、同じく帰国後も留学を継続している友人と連絡を取り合ったりしてモチベーションを高めあっていました。

今期の留学も残すところ一ヶ月ほどですが、新たに始まる千葉大学のオンライン授業とクロスメジャープロジェクトワークとの両立ができるように、規則正しく、息抜きもうまく活用し最後まで頑張っていきたいと思います。

海外派遣留学プログラム報告書

（報告期間：2020/05/05～2020/06/26）

１．勉学の状況

5 月上旬には帰国してオンライン授業を受け始めてから 1 ヶ月が経過しました。千葉大学の 1 タームが始まるのが 5 月ということもあり、それまでの約 1 ヶ月間はオストラバ大学での学習に集中することができました。一方で前回の報告書にも記載したように、帰国後のオンライン留学の方が結果的に負担が重くなってしまい、たった 5 つの授業を履修していただけにも関わらず一週間の中で授業の代替課題をこなしていくことが困難になった時期もありました。例えば Czech for Foreigners 1 というチェコ語を学ぶ授業では、週に取り組むテキストの分量こそ変わらないものの、レクチャーが無い分独学で学ばなければならず、週課題を取り組むのに長い時間を要していました。English for Tourism の中では、出身国が同じメンバーでグループプレゼンテーションをする予定だったのですが、日本から留学していたその他の学生が私以外帰国後の留学継続が大学に許可されていなかった為一人で担当することになりました。その他の授業の課題にも追われる中でプレゼンテーションスライドの提出期限に間に合わず、その科目の単位取得を断念することになりました。自分自身の中では出来る限りどの科目にも真剣に取り組んでいるつもりだったのですが、帰国後の継続の難しさと同時に悔しさを感じました。私の語学力がもう少し高く、それぞれの課題にかける時間を短縮させることが出来ればやり遂げられたのではないか、といった不甲斐なさを感じましたが、これは次への課題として大事にとっておこうと思いました。

5 月を過ぎるとどの科目も最終課題の時期に移り、毎週続いていたレクチャーから二、三週間後の提出期限のレポートやテストを控える段階になりました。English for Tourism を除いたその他 4 科目全て、何とか無事最終課題とテストを終えることが出来ました。しかしその時期は千葉大学の 1 タームも開始していた為、両立が困難を極めており、正直な話をすると留学の最終課題の方を優先していました。それでも千葉大学で最終レポートやテストを受けるよりも作成や対策などの取り組みに時間を要し、使用する言語や課題形式などが違うだけで難易度が上がるように感じました。しかしそのような経験が出来たことは本当に貴重な上に、実際に精神面を含め成長を感じることが出来ました。実際に自分自身が作成したレポートや週課題のレポートを振り返って見てみると、当時苦しいながらも決して手抜きなどせずに取り組んでいた様子が見て取れるので、やる気や勇気が湧いてきます。大事に 1 つのファイルにまとめており、時折見返しています。私の留学の軌跡として生涯とっておこうと思っています。

２．生活の状況

生活の状況は、新型コロナウイルスの影響でアルバイトも千葉大学に通うこともなく、基本的に帰国後はずっと一人暮らしの自宅にいて、数日に一度スーパーマーケットに食料や生活用品を買いにいくという生活を送っていました。しかし、チェコ滞在期間に多くの自然に囲まれている中で散歩が日課になっていたので、日本でも自粛期間に散歩するようになりました。これまで以上に季節の移ろいや歩道に植えられている草木が目に入るようになり、留学生活で得た習慣が帰国後の生活にも影響する事を感じました。その他、留学中は自炊するのが当たり前になっていた為、帰国後もコロナ禍ということもあり自炊がメインになりました。散歩もそうなのですが、料理をする時間も他人との交流の少ない中長い時間パソコンと向かい合っている毎日の息抜きになっていました。

課題に追われる毎日の中で、講義室で授業を受けていたのが自宅で代替課題となるとこんなにも難易度が上がるものなのか、という事を千葉大学のオンライン授業の中でも感じました。その為、負担や難易度が増大するのは語学力の問題だけではなく、慣れない形式に一変する事や本来授業時間内で行う予定だった、言わば制限時間があったはずがそれがなくなる事により、個人個人の課題をこなすスキルによっては負担が増えてしまうという事なのでは無いかと思いました。その為、限られた時間の中でできる限りで仕事をこなしていく力を向上させねばならないという自分自身の課題を見出すことが出来ました。これはオンライン留学をした、もしくは千葉大学のオンライン授業を受けた、のどちらか一方だけでは気付けなかった学びであると思いました。両方のオンライン授業を受けた上で一貫した自分自身の課題を見出すことが出来たのだと思います。それにより、オストラバ大学で履修していた科目を全うしきれなかったことに関し語学力に負い目を感じすぎていた部分がありましたが、タスクとの向き合い方にも大きな反省点があったと気づくことが出来ました。

オンライン留学に切り替わった当初は、オンラインで継続して意味があるのだろうかと内心思っていましたが、現地で過ごした 2 ヶ月間だけを私の中で“留学”としていたら、ただただ楽しく過ぎていった時間という記憶になってしまうところだったと思います。その為、帰国後も一貫して半期の授業をやり遂げる、オンラインでの授業を受講し続けるという、当初予定していた期間持続した経験は確かに私の中で成長に繋がったのでは無いかと感じています。授業期間も後半になるにつれ忙しくなり、授業の代替課題に負担を感じながらも途中で諦めずに継続した時間とその経験は、今後新たな場所で戦っていく際の糧になると確信しています。また、今回の派遣留学を通し自分自身に対して感じた課題についても、今後の日本での生活の中で再挑戦し成長に繋げていきたいと思います。楽しいだけじゃない留学を経験出来て光栄でした。派遣留学プログラムに参加できた事を感謝したいです。留学に際し様々な支援・ご指導をして下さった先生方、留学生課の皆様、本当にありがとうございました。